交遊抄

夢のような日々

鶴　光太郎

1992年2月。旧経済企画庁で経済白書執筆の任にあった私は日本の経済システムを取り上げたかった。最新の研究を知りたい。その一念で世界的な権威である青木昌彦さん（現スタンフォード大学名誉教授）に無謀にも「お会いしたい」と手紙を出した。

ほどなくファクスで快諾のお返事。そこにはジョン・テイラー氏始め名だたる教授陣との面談アポとホテルの予約までが。天にも昇るような気持ちであった。

スタンフォードでの数日間は夢のように過ぎた。今何が重要か。議論の中で期せずして青木さんと私の一致した答えはコーポレートガバナンス（企業統治）。当時まだ耳慣れない言葉だった。どこの馬の骨かわからない人間を快く受け入れていただき、青木さん、ひいては、アメリカの度量の大きさを痛感した。

二十数年にわたるお付き合いで今も仰ぎ見る存在であることは変わらない。「世界の青木」と思えばひるむ。当時から続く図々しさが私の身上かもしれない。

青木さんを思うと浮かぶ言葉が、「新手一生」と「転石苔むさず」だ。やっと議論に追いついたと思いきやはるか遠くにそのワイルドな姿を見つけることの繰り返し。自分の成長のなさをいつも気付かせてくれる。（つる・こうたろう＝慶応大学教授）

(C)日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。